

SDGs。2015年の国連サミットで採択され、早11年。タイムリミットである2030年も約4年後とそう遠くない未来になっています。めまぐるしく変化している今の社会で持続可能な開発目標として掲げられている17の目標のうち、幾つものものがどれほど達成へと向かっているのでしょうか。はたまた、達成することはできるのでしょうか。SDGsを始めとした国際問題はこれからの未来を生きる私達にとって無関係ではなく解決しなければいけないものです。では、問題解決のためには何が大切なのでしょうか。

最近の身近なもので言えば、熊の出没のニュース。冬眠し損ねた熊が人間を襲ってしまう事件です。この件を受けてニュースでは熊の出没情報と共に熊の駆除についても多く取り上げられるようになり、直接被害に遭っていない私達も、熊の恐ろしさや恐怖を知ることができました。一方で、SNSを通じて自治体へ「殺すな」「可哀想」「山に返せ」というような活動を批判する意見が多く寄せられるようにもなりました。実際に熊の被害に遭っている方々はこれらの意見をどのように受け止めているのでしょうか。また、最前線で戦っている猟友会の方々がこの意見を受け取ったらどう思うのでしょうか。熊の被害で実際に困っている方々が、問題を解決するための策を講じているのを、何気ない批判で邪魔しているのです。ですが、批判をしている人たちの意見も立場が違うだけで悪ではありません。熊の立場から考えれば、人間によって住む場所を奪われた被害者だと言うこともできます。決して困っている人たちのことがどうでもいいわけではないはずです。

問題は二つの立場が対立し、「自分の考えの方が正しい」と主張し続けた場合のことです。もしも主張を続けてしまったら、小さな対立はやがて大きな対立へと発展し、国際問題であれば戦争のような悲惨な争いに繋がってしまいます。その大きな対立を阻止するために、今の社会や人々に必要なのは“建設的批判”という選択肢を持つことだと思います。建設的批判とは相手を非難したり否定したりする破壊的批判とは違い、「どうすれば現状を改善できるのか」と問題を解決に導くような具体的な改善案や代案を伴った前向きでポジティブに受け取れる考えのことです。熊の例で言えば、「熊を殺すな」と言って終わるのではなく、「熊が人里に降りてきて人を傷つけないような環境を整えるにはどうしたらいいのか」や「森林保護をどう進めるか」と言った考えになります。

建設的批判は、相手を冷たく突き放すのではなく、暖かく、具体的な道筋を示してくれるものです。では、どうすれば破壊的批判ではなく建設的批判という選択肢を持てるのでしょうか。自分の思いを諦め相手に同意する。それとも相手の改善策を論理で言い負かす。いいえ、そんな方法では平和な世界どころか争いへの第一歩を踏み出してしまいます。建設的批判という選択肢を持つためには、複数の視点から物事を見ること、そして、相手と自分の意見のいいとこ取り。この二つが鍵になります。

まず、視点。自分だけの立場ではなく、相手の立場、第三者の立場、さらには社会全体の立場から物事を見ることで、初めて問題の本質が見えてきます。先ほどの熊の問題でも、被害者、猟友会、動物保護を訴える人、それぞれに理由があります。一つの視点だけで判断してしまえば、対立しか生まれません。

次に、いいとこ取り。これは相手の意見を全て否定するのではなく、「ここは参考になる」「この考え方は取り入れられる」とお互いの良い部分を組み合わせる考え方です。実際！社会の多くの問題は、一方の意見だけで完全に解決できるほど単純ではありません。だからこそ、違う意見同士を組み合わせる柔軟さが必要なのです。

最初に述べたように今の社会や世界はめまぐるしく変化していて、私には到底想像できないほど沢山の問題や課題が潜んでいます。それを解決するには、批判だけでは足りません。その先の建設的な考えや意見。これらが両輪となってこそ私たちは問題を解決に導けます。批判から一步踏み出して、視点を変え、互いの良いところを取り入れながら対話をする。そうすれば私達の生きる未来は、平和でみんなが笑顔で過ごせる、そんな世の中が目指せるのではないのでしょうか。